博士学位申請論文要旨

成蹊大学文学部
遠藤 不比人

「破綻／思弁するモダニズム――死の欲動とイギリス戦間期の文学」

本論文は、イギリス・モダニズム文学と同時代の精神分析が共有した言語的な身振りと、その強度を「戦間期」という歴史的な視点を導入しながら読解をすることを試みる。その目的の一つは、従来の英米文学研究において暗黙の了解になっていると言ってもよい「文学」と「精神分析」という制度的な区分けを、具体的なテクストの言語に即して攪乱することにある。この制度的な区別は、精神分析を「文学理論」という（それ自体制度化された）言説と見做しながら、それを文学言語の解釈のための一種のメタ言語として応用、援用するという態度を通じて実践される。この読解姿勢は、しばしば、文学言語のみならず精神分析の言語的な強度を、英語圏で形骸化し制度化された「文学理論」なる水準に還元、単純化してしまうことになる。本論文は、むしろ、精神分析が理論的な言説として破綻していくプロセスを注視しながら、そのプロセスが同時代の文学言語と濃密に共振する様を精読していくことを目指す。理論的あるいは主題論的な破綻というパフォーマンスにおいて、イギリス・モダニズム文学と同時代の精神分析の間テクスト性を読解することに、本論文の主眼がある。さらにそこに歴史的視点を導入しながら、モダニズム文学と精神分析という制度的な分類がまさに破綻するところに露になる独特のテクスト性に、「戦間期」という歴史性が刻印されていることを明らかにしたい。

本論文の企図をさらに具体的に述べる。本論文は、ジークムント・フロイトとその理論をさらに過激化したメラニー・クラインによって、第一次大戦直後に提出された「死の欲動」という矛盾に満ちたメタ心理学的思弁が、主題的な破綻という形式において、同時代のモダニズム文学の言語において反復されていることに注目する。これを言い換えれば、フロイトとクラインのメタ心理学的な思弁の（文学）テクスト化に、本論文は、イギリス・モダニズム文学の特質を読むことになる。本論文が使用する「モダニズム」という用語の定義は、それを第一の前提条件とする。

本論文の構成をまずは簡略に述べ、つぎに各章における読解について触れてみたい。本論文は３部構成から成り立ち、合計７つの章がそれに含まれる。またそれに先立ち、序章が、また論文の最後にはエピローグが加わる。第 I 部「ヴァージニア・ウルフ」は、イギリス・モダニズム文学において正典と見做されるヴァージニア・ウルフの二つの主要作品『ダロウェイ夫人』（1925）と『灯台へ』（1927）を扱い、そのそれぞれが１章と２章となる。この２つのテクストにおいて、戦間期の階級闘争が「死の欲動」というフロイト／クライン的なメタ心理学によって媒介、表象されていることが明らかにされる。第 II 部は「ブル

ームズベリー」と題され、いわゆる「ブルームズベリー・グループ」と称されるこの集団のメンバーにおいて、精神分析との間テクスト性が濃厚なウルフ以外のテクストに着目する。具体的には、メラニー・クラインの翻訳と紹介に尽力したアリックス・ストレイチーとジョウン・リヴィエールという、従来のところ英文学という脈絡で十分な注意を払われてこなかった女性分析家のテクストを精読する３章と、伝記作者として名を知られているもののモダニズム文学の正典とは目されてこなかったリットン・ストレイチーを論じる４章から、この第 II 部は構成される。この意味で、この第 II 部は、精神分析との間テクスト性において、アリックス・ストレイチー、ジョウン・リヴィエール、そしてリットン・ストレイチーをイギリス・モダニズム文学の正典に格上げすることを目論む。第 III 部は、「戦争」と題され、第一次大戦後の言説空間を「外傷的」なものと見做しながら、一種の「戦争文学」としてのモダニズム文学という視点を導入する。そこでは、「ブルームズベリー」以外のモダニズム的な言語――キャサリン・マンスフィールドとメイ・シンクレア――が、フロイトの言う「反復強迫」をテクスト・レヴェルで体現し、主題的な破綻を通じて「死の欲動」をパフォーマティヴに反復しながら、特異な「戦争文学」と化すことを論じる。マンスフィールドを読むのが５章、シンクレアを読むのが６章となる。また７章では、戦間期のイングランドのナショナリズム的イデオロギーが、フロイトの「死の欲動」を流用しながらも、フロイトの言語それ自体がその言説的磁場から過激に逸脱する有り様を読みながら、こういったフロイトのテクスト性を政治的＝美学的に賞揚したウィリアム・エムプソンの思想的な可能性を示唆する。

さらに具体的に、各書の議論を要約していきたい。まず序章「破綻あるいは失敗の美学／倫理――イギリス・モダニズム文学と精神分析」では、T・S・エリオットが「ハムレット」（1919）において、フロイトの「快感原則の彼岸」（1920）に先駆けて、「死の欲動」に戦慄する様に着目する。このエッセイを有名にしたエリオットの用語「客観的相関物」を欠如した（とエリオットが見做す）ハムレットの対象をも凌駕する心的興奮は、フロイトであれば「快感原則」を逸脱した心的な刺激量として「死の欲動」と呼んだであろうものである。エリオットはこの心的な興奮を「狂気」と同一化し、それを表象する然るべき「客観的相関物」を提示できなかった『ハムレット』という戯曲を美学的に破綻した失敗作と断じたが、この審美的な破綻は「快感原則の彼岸」の理論的な破綻と類似している。このテクストの理論的破綻を美学的な次元で再評価したのは、レオ・ベルサーニ『フロイト的身体――精神分析と美学』であった。ベルサーニの読解は、刺激の減少を快、増大を不快とする「快感原則」が制御不能な「死の欲動」を、フロイト的精神分析の真理であるエディプス理論の破綻として注目する。ベルサーニは、リビドー的な刺激が多方向に（対象を限定せず）拡散＝増幅する乳幼児の「多形倒錯」に「死の欲動」の原型を見ながら、そのリビドー的運動を「性器」に回収しようとする試みを、エディプス理論の基本戦略と見る。この脈絡でベルサーニは、リビドー的刺激の増加（死の欲動）を性物質の放出によって暴力的に突如中断するペニス的快感に、文字通りの自己破壊の衝動を指摘する。ここでベル

サーニは「死の欲動」の抑圧、中断こそが自己破壊を意味するというパラドクスを示唆している。このパラドクスは、本論文を貫く主題である「戦争とは死の欲動の抑圧である」という逆説と直結している。

ここで本論文が参照するのがジャックリン・ロウズのフロイト読解である。ロウズは、リビドー的な拡散をペニスに一極集中するみずからのエディプス理論を、世界に拡散する暴力を一極管理する強大な権力に例えながら、その権力それ自体が反復する暴力を危惧するフロイトを強調する。みずからの精神分析的真理であるエディプス理論をいわば最終戦争（が反復する暴力）に擬するフロイトは、戦争なるものが絶対的な「真理」を巡る暴力であることを暗黙のうちに語っている。ここで示唆されるのは、「真理」へと突き進む欲望としての戦争とエディプス理論との相同性であるのと同時に、その真理の不可能性を体現するフロイトの理論的破綻「死の欲動」の帯びる政治的可能性である。精神分析的な真理たるエディプス理論による「死の欲動」の抑圧に失敗しつづけ、多くの留保と修正をみずからの論理に追加するばかりか、真理への到達に関して懐疑的な姿勢を繰り返す戦後のフロイトのメタ心理学的テクスト性は、ラディカルな「反戦論」としてのポテンシャルを蔵している。つねに論理的な方向性が拡散しながら、根本的な理論的枠組みが解体していき、真理への到達に懐疑的に遅延しつづけるこのテクスト性は、「死の欲動」のテクスト的パフォーマンスと化している。したがって、その抑圧、中断としての「真理」への暴力的欲望は、戦争のリビドー経済学をテクスト的に再生産していることになる。ここで見るべきは、死の欲動の抑圧としての戦争というパラドクスであり、その意味でのフロイト的メタ心理学の反戦論としての可能性である。

このテクスト性は、「快感原則の彼岸」と同時代のエリオット、あるいはヴァージニア・ウルフの言語にも刻印されている。エリオットに関して言えば、「ハムレット」において「死の欲動」に戦慄しながら、同年出版の「伝統と個人の才能」において共同体（伝統）の「真理」の外傷的不可能性を独特の弁証法で語る彼の言語は、「反復強迫」たる「死の欲動」と近接している。また、ウルフの『灯台へ』も男性エディプスの根源的な不可能性をテクスト化している。このテクスト性を共有する同時代のモダニズムの言語が、続く各章において、階級闘争、第一次大戦といった文脈で読解され、その政治的、思想的な可能性、そこに触知できる「戦間期」という歴史性が明らかにされる。

第１章「『欲動』の美学化とその不満――『ダロウェイ夫人』と『快感原則の彼岸』」では、ウルフの『ダロウェイ夫人』が同時代の階級闘争をフロイトの「死の欲動」を彷彿とさせるテクスト性＝歴史性において表象（に失敗）していることを論じる。『ダロウェイ夫人』と「快感原則の彼岸」が共有するテクスト性がこの意味で注目される。両者に共通するのは、みずからの主題的、理論的枠組みでは表象できないものを表象しようとする試みの破綻を審美的に解消しようとする一種の「テクスト的保身」とでも呼ぶべき身振りである。「快感原則の彼岸」であれば、「死の欲動」というエディプス的に表象不能なものを表象すべく、エロスと「死の欲動」といったロマン派的二元論が採用されていた。しかしエ

ロス（リビドー）的な過剰こそが「死の欲動」であるとすれば、この二元論は破綻をしている。そもそも「死の欲動」という思弁すらが、リビドーの増殖／零度という根源的な矛盾に引き裂かれていた。『ダロウェイ夫人』の場合であれば、美的な表象不能性を政治的な代表性の不可能性という次元で歴史化している。このテクストは労働者階級の身体に過剰なリビドーを投影しながら、その審美的な表象不能性をトーリー／ブルジョワ的な代表制の危機として政治化している。この労働者階級という過剰に直面したブルジョワ主体はそれを後期ロマン派的な美学（愛死）によって解消しようとするが、その美学化が抑圧できない「不気味な身体」が物語内部に回帰する。露骨なパロディーとしてこの身体（労働者階級）を怪物化するテクストの戦略は、労働者のブルジョワ的他者化から自己言及的な距離を確保しようとするアイロニーである。しかしそれは同時にみずからの美的（＝ブルジョワ的）表象／代表から逸脱する真に「不気味なもの」をステレロタイプに収容しようとするテクスト的な保身でもある。『ダロウェイ夫人』にあっても「快感原則の彼岸」においても、その審美的なテクスト的保身を攪乱する過剰な強度にこそ、「死の欲動」の真の不気味な身体性＝テクスト性を触知すべきである。このテクストはこの意味で労働者階級（の身体）を美的／政治的／ブルジョワ的に表象＝代表することのラディカルな不可能性を、みずからのテクスト的な症候＝破綻として露にしている。

第２章「ラディカルな『内部』としての『外部』――『灯台へ』とメラニー・クライン」では、同様に戦間期の階級闘争と直面した『灯台へ』とクライン的なメタ心理学との間テクスト性を読解した。特に注目すべき問題は、クライン独特の「超自我」という心的な審級である。オーソドックスな（アンナ）フロイト派の理論構成では、超自我とは自我が外的（＝社会的）価値観を内面化することで内部に形成される良心のごときものと想定される。一方、クラインにおいて超自我とは、自我の内部の暴力性（エス）を抑圧すべくその暴力性から派生するものである。その出自からしてクライン的な超自我は抑圧の対象を凌駕する暴力性を帯びる可能性がある。クライン的自我は内部のこの暴力的な増殖（これがクライン的「死の欲動」である）を緩和すべく、その暴力性を外部に投影する。その結果、外部（母の身体）は自身の内部の暴力性のコピーとして、自我におけるパラノイア的不安の契機となる。『灯台へ』はこの心的な機制を同時代の階級闘争におけるブルジョワ的不安の構造として美的に言語化している。例えば、このテクストにおける外部＝怒涛の海という美的な表象は――海は「母性的なもの」の隠喩として機能している――革命的な「大衆」を意味するが、それは同時にブルジョワ的登場人物内部の暴力性の投影であることをテクストは暗示している。

クラインは、この外部（母の身体）への暴力、憎悪を制御しようとする自我の欲望を「償い」と呼び、そこに幼児による母の理想化という心的な傾向を指摘した。しかし、クラインは同時にこの理想化がしばしば過剰なものとなる病的な傾向をも指摘している。この過剰性にクラインが見るのは、みずからのパラノイア的不安とそれが惹起する対象へのサディズムを抑圧する際の一種の「反動形成」であった。異常までの理想化は、抑圧の強度を

示唆するのと同時に、抑圧の根源的な不可能性を逆説的に示す病的な症候ともなっている。正反対のリビドー的な方向性（愛）の過剰の中に、暴力性が不気味に回帰している。ウルフの言語はこのパラドクスを自然の生命力（エロス）の過剰な美学化としてテクスト化している。戦間期の典型的なパストラル表象――労働者の生命力と自然のそれとの一体化と理想化――の過剰は、ブルジョワ的な不安＝暴力の対象たる労働者階級のクライン的な「償い＝理想化」であるのと同時に、その不可能性をも物語ってもいる。この過剰な理想化のただ中に、抑圧されたパラノイア的暴力性が不気味な残余として触知できる。『灯台へ』はクライン的なメタ心理学を（文学）テクスト化しながら、ブルジョワ的な美的表象の不可能性を『ダロウェイ夫人』と同様にテクスト化している。両者とも階級闘争におけるブルジョワ的攻撃性（の隠蔽）としての他者表象の不可能性を巡るメタ心理学となっている。「戦争後の戦争」と称される 1920 年代のイギリスの階級闘争は、ウルフの言語において精神分析との間テクスト性を生産しながら、「戦間期」独特のテクスト性＝症候としてそこに刻印されている。

第 II 部「ブルームズベリー」の最初の部分である第 3 章「『母』を巡るメタ心理学――ブルームズベリー、クライン、モダニズム」は、このメラニー・クラインのメタ心理学に強く惹かれたアリックス・ストレイチーとジョウン・リヴィエールのテクストを読解する。この読解において浮上してくるのは、大戦後のブルジョワ的な母子関係を巡る問題系である。具体的に言えば、「母」を巡る暴力性と不安を記述するクラインの理論に没入した彼女らの言語を駆動するのは、この時代の「母」との関係性において抑圧された娘たちの不安と攻撃性であった。アリックス・ストレイチーの場合で言えば、攻撃的な女性参政権運動で名をはせた母と、戦後の非政治化した娘というようなイギリスのフェミニズムの歴史における基本的なナラティヴが妥当する。この母への不安、攻撃性が彼女のクラインへの傾倒を実証的に説明できる。ジョウン・リヴィエール関して言えば、ヴァージニア・ウルフが殺害の必要を力説した 19 世紀風の「家庭の天使」と呼ばれる母の抑圧を伝記的な次元で指摘することができる。しかし、クラインのメタ心理学的な「母」はこのように歴史化可能な実証的な母に還元できるものではない。ここで興味深いのは、同時代のメラニー・クラインとアンナ・フロイトの「超自我」を巡る論争である。アンナ・フロイトのオーソドックスな理解では、子供の超自我は現実の両親の価値観の内面化であった。一方で、クラインにあっては、子供の自我内部（超自我）の攻撃性の投影がパラノイア的不安の対象たる母である。アリックス・ストレイチーとジョウン・リヴィエールはこの論争において、クラインを擁護した。この論争の基本点は、精神分析における「母」を、実証可能な（現実）の母親に還元するべきか否か、むしろそれをメタ心理学的な思弁として現実の母親と分離するべきか、という問題として要約できる。この二人の分析家のクライン理論の擁護は、実証的＝伝記的な次元で語りえる「母」を喚起しながらも、その現実的＝歴史的次元を逸脱するメタ心理学的な母、むしろ伝記的＝歴史的な心理（神経症）を構造化する伝記＝歴史という物語に回収できない「母」という超越論的なステイタスをも示唆している。

この脈絡で本章は精神分析における歴史化できない「もの＝母」という点を前景化し、歴史主義的な精神分析批判の限界を指摘した。

第４章「リットン･ストレイチーのクイア的自己成型――『エリザベスとエセックス』」は、リットン・ストレイチーの『エリザベスとエセックス』（1928）とフロイトのダ・ヴィンチ伝『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼児期のある思い出』（1910）との間テクスト性が帯びる「戦間期」における政治＝思想的な意義を論じた。この２つのテクストには間テクスト性などという用語を使用する必要がないほどの類似性がありながら、この点につき従来の批評は寡黙であった。本章が特に着目したのは、このダ・ヴィンチ伝に関してレオ・ベルサーニがジャン・ラプランシュを参照しながら読む、フロイトにおける「昇華」という概念のラディカルな修正である。一般的な理解では、「昇華」とは、性リビドーが、非性的で社会的に価値がある（とされた）対象へ再備給されることで、人間の文化的な事業の原動力に転換する心的機制を意味する。しかし、ダ・ヴィンチの幼年期を記述するフロイトは、これとは異なるリビドー経済学の可能性を示唆する。父によるエディプス的抑圧が不在であったレオナルドにおいて、性リビドーの無限の拡散、増殖という「多形倒錯」が原型をとどめたまま残存し、それは、彼の仕事の驚嘆すべき多産性と、その仕事のすべてに見るべき不完成性という形で顕れた、というのがフロイト＝ベルサーニ的な「昇華」の再解釈である。ベルサーニはフロイトのテクスト性にもこれを読む。（エディプス）理論への到達を目指しながら、そこから逸脱する心的過剰に多くの言葉を費やし、理論を完結できずにいる彼の仕事を特徴付ける多産性、未完成性にも、レオナルドと酷似したリビドー経済学――新たな「昇華」の可能性が暗示されている。そしてこれは「死の欲動」のテクスト性でもあった。

この点から興味深いことに、ストレイチーはこの意味での「昇華＝死の欲動」を、エリザベス 1 世における政治的な判断の狡猾さ、特に戦争を回避する戦略に重ねている。政治的な判断、結論（という仕事）をつねに遅延、宙吊りにする彼女の非決断性は、現実の戦争を回避することに奏功しながら、すでに序章において見た「死の欲動」の思想的＝政治的な可能性を示唆している。これと対照的なのが、エセックス伯爵の政治的な好戦性としての軽挙妄動であり、それは粗暴で単純な男性的ヘテロセクシュアリティとして露出している。ここで留意すべきは、自身のホモセクシュアリティの有り様をエリザベス的なそれに仮託し、ストレイチーがリビドー的な中断（＝決断）のない一種の「性器なき性交」を彼の同性愛的な実践として思想化していたという事実である。ここで同時に想起すべきは、ストレイチーのホモセクシュアリティへのホモフォビアと政治的好戦性が連動した同時代人、ルパート・ブルックである。エセックス卿と彼を重ねて見るときに、「良心的兵役拒否者」たるストレイチーのクイアな言語が蔵する精神分析的な反戦論としての可能性が明らかとなる。

第５章「不在の戦争、あるいは享楽の反復――キャサリン・マンスフィールド『至福』」は、このような「昇華」（抑圧、切断なきリビドーの拡散、増殖）としての「死の欲動」に

駆動されたキャサリン・マンスフィールドの短編小説「至福」を読解する。ここで驚くべきは、「快感原則の彼岸」のフロイトに先駆けて 1918 年出版されたこの作家のテクストが、このようなテクスト的パフォーマンスを露にしているという事実である。主要登場人物の身体を貫くのは、まさに「快感原則」が制御できない過剰なリビドー（至福）の恣意的な反復であり、それは対象を凌駕する強度を加速度的に増加させていくが、エリオット的「客観的相関物」（心理学＝文学的説明）をテクストは示すことはできない。それはこの人物が解答不能な修辞疑問を繰り返すナラティヴの運動に如実である。さらにこの「至福」なるものの反復の暴力性と恣意性は、戦争神経症患者における外傷のそれを想起させるものである。「快感原則の彼岸」のフロイトは、外傷の反復強迫に外傷への固着というマゾヒズムを思弁したが、その意味で、外傷の反復強迫は、マゾヒズムな享楽（の反復）というメタ心理学的な思弁を喚起する。その意味からこの短編小説のタイトルである「至福」は意義深い。実際にこの語は作者の病である肺結核と隠喩的に連接している。そして戦争神経症において反復するものが戦争（の悪夢）であるとすれば、ここで戦争＝享楽という等式が可能となり、マンスフィールドの言語はそこに病＝死＝享楽という等式を追加することになる。さらに言えば、マンスフィールドが戦争をみずからの病と修辞的に接続もしている事実からすると、このテクストにおいて不在の戦争が、病＝死＝享楽として外傷的に反復していることにもなる。この「死の欲動」にみずからの主題論的一貫性を攪乱されるマンスフィールドのテクストは、ウルフあるいはフロイトのようにテクスト的な保身を選択する。ほとんど「享楽」としか呼べないリビドーの過剰を、この短編小説は凡庸なヘテロセクシズムに最終的には収容してしまう。この保身の凡庸さは、逆説的に、この言葉が遭遇した戦争＝外傷＝享楽の強度の症候として読むべきである。ここで強調すべきは、このテクストの通俗性が、フロイトを先駆けるそのメタ心理学的洞察（というよりはその身体的実践）の歴史的＝テクスト的な症候と化しているという事実である。

第 6 章「心に開いた生の傷――メイ・シンクレア『ロマンティック』」では、同時代のヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンスフィールドからフロイト的精神分析からの悪影響を指弾されたメイ・シンクレアの『ロマンティック』（1920）を読む。ここで問題となるパラドクスは、戦後に流行したフロイトの精神分析に批判的であったウルフとマンスフィールドの言語が、フロイト（エディプス）理論の不可能性を体現するという意味で真にフロイト的であるという点であるだろう。この点から意義深いのはつぎのようなパラドクスでもある。彼女らから批判されたシンクレアの言語は、作者の意図というレヴェルではフロイト的エディプス理論の悪影響が顕著である。しかし、『ロマンティック』は同時にその次元に還元できないテクスト性を帯びており、それがウルフ＝マンスフィールドに匹敵する細部をテクスト内部に生産している。この章の題目にも採用された「傷」という形象は、あからさまにエディプス的物語において人物造形された人物の外傷を暗示し（父による母への愛の抑圧というレヴェルで）、その限りにおいてウルフやマンスフィールドの批判は正しい。一方で、この傷はほとんどラカン的な意味での象徴的身体の裂け目、そこに露出す

る「享楽」といったものを示唆する露骨な形象ともなっている。このテクストは戦闘場面を直接的に描写するのだが、この傷は戦死者の傷、主要登場人物のエディプス的な外傷、彼とテクストそれ自体の身体の裂け目を同時に暗示し、その修辞学において戦争＝享楽という等式を露にしている。いささか露骨でありながらも、この等式の前景化はシンクレアをフロイトの悪影響という評価から救い出す契機になる。しかしながらこの小説は、この等式を巡ってみずからの言語を破綻させることはせずに、むしろテクスト的な保身を選択する。この戦争＝享楽への反復強迫的／外傷的かつマゾヒズム的固着を、主要登場人物の身体に形象化しながらも、ナラティヴの結論として退化論的言説を引用し、このメタ心理学的な思弁を心理学＝退化論化してしまう。マンスフィールドに精神分析の悪影響を指摘され酷評された『ロマンティック』は、皮肉なことにも、フロイトとの間テクスト性において「至福」と酷似した身振りをしている。つまり、「至福」に見たテクスト的なパラドクス――メタ心理学的洞察がそれを抑圧する（盲目たる）通俗性を症候として生産してしまうテクスト性＝歴史性を、『ロマンティック』にも指摘することができる。

第 7 章「共同体とエロス、あるいは死の欲動の美学化――ウィリアムズ、エムプソン、フロイト」では、戦間期のイングランド表象たるパストラル的修辞学に潜在する暴力性を考察した。レイモンド・ウィリアムズは『田舎と都会』において、エロス化されるパストラル表象に攻撃的なトーリー性、あるいはその過激化した形式であるファシズムを読解したが、その視点をさらに発展させたのがウィリアム・エムプソンである。彼のパストラル論『牧歌の諸変奏』の草稿版とも呼ぶべきテクスト「死とその欲望」（1933）は、戦間期の典型的な田園表象において、男性的主体と自然（イングランド）とのエロス的な一体化が死の欲望として美学されることに注目する。この死のエロス化に含意される美学＝政治学をつぎのように理解することができる。個人は個人の死を死ぬことにより、イングランドという永遠のトポスを可能にする（非）時間性へ参入することが可能になる――つまり、極右イデオロギーによる個人＝国民の死の美的な搾取こそがここで指摘されなくてはならない。エムプソンは同時代に流行した仏教思想（涅槃思想）あるいはマリオ・プラーツ的な「ロマンティック・アゴニー」とも呼ばれる美学を参照しながら、この死の美学化とフロイトの「死の欲動」を比較検討する。ここでフロイトのメタ心理学的概念が 19 世紀風の生物学を引用しながら、一個の有機体の死を、その時間性を超越する「種」への参入と語りかねないことを想起すれば、この概念を美学＝政治学的に流用することは容易である。しかしこのイデオロギー的な可能性に抵抗する「快感原則の彼岸」のテクスト性としてエムプソンはフロイト特有の「矛盾」を賞揚する。これは、本論文が反復してきたフロイト読解と多くを共有する。「死の欲動」のテクスト的パフォーマンスとしての矛盾、破綻は、ラディカルな反戦論としての可能性を蔵している。この視点から本章はエムプソンのフロイト読解を評価し、死の欲動の美学化の不可能性、その破綻に見るべき政治的、思想的な可能性を同時代的に洞察したエムプソンに注目をした。

エピローグ「ラディカル・クライン」では、これまで読解してきたイギリスあるいはヨ

ーロッパの戦間期が生産した独特のメタ心理学的思弁が、現代日本においてその身に帯びるアクチュアリティを考察した。その前提として、現代日本の言説空間を「戦間期」という時間性、もっと具体的に言えば、「戦後」という時間の外傷的な不可能性という点から再考する必要がある。「快感原則の彼岸」が冒頭から問題にするのはこの時間性である。戦争神経症者の症状たる「反復強迫」とは、過去＝戦争が過去化せずに現在に直接露出＝反復する時間性を意味していた。この意味からフロイトの戦後のメタ心理学において「不安」が重要な位置を占めるようになる。「不安」を巡るフロイトの議論が錯綜する一因は、この情動が外傷的な反復に対する防衛機制であるのか、この外傷的反復をマゾヒスティックに享楽することを暗示するのか、決定不能な点にある。この問題機制において、「戦後」の「不安」とは「過去＝戦争」が「未来」から反復することへの防御、あるいは、それを享楽するマゾヒスティックな欲動に由来するものである。いずれにしても、ここで問題であるのは、フロイト的な「反復強迫」という点からすると、「戦後」とはみずからが「戦前」になり得ることの「不安」に貫かれており、その意味において「戦後」という時間の外傷的な不可能性ということをふたたび強調しなくてはならない。

この時間性は、「戦後」日本における「靖国」を巡る言説に潜在している。戦死者へのメランコリックな固着（同一化）という「戦後」的な欲望が、憲法改正という「戦前」的な政治性と連動するイデオロギー／リビドー的磁場において、ヨーロッパ戦間期独特の思弁たる精神分析が語ることは多い。特にここでフロイトのメランコリーという概念装置が重要である。フロイトによれば、死者の内面化（同一化）は、死者への抑圧された攻撃性をみずからに振り向けることになり、その結果、メランコリックな主体の内面には、死者への攻撃性を自我に向けるサディスティクな超自我が形成される。そしてこの超自我の攻撃性をマゾヒスティックに享楽するのがメランコリー的な症状となる。その意味で、戦死者と同一化する主体は、内面化された戦死者的な超自我の声に従順に、マゾヒスティックに自己破壊を欲望しながら、国家が暴力を行使するための法的整備に腐心することになる。フロイトのメタ心理学のパラダイムにおいては、この「靖国」的なメランコリーの欲動的な悪循環、戦後と戦前の外傷的な決定不能性の外部はない。

本章は、この視点から、フロイト的メランコリーとの差異性においてクライン的なメランコリーを再評価するジュディス・バトラーの議論を参照する。クラインにおけるメランコリーとは乳幼児による外部の対象の内面化（それは口唇サディズムに駆動された摂食行為による）を意味するが、これはエスを抑圧する超自我をエスから分離するために必要とされる表象となる。その意味で、この表象はみずからの暴力性を暴力的に抑圧する「良い対象」となる。みずからの暴力を抑止する暴力たる「良い対象」が十分な暴力性を発揮すべく、クライン的乳幼児はさらに口唇サディズムを発動し、対象（＝表象）の内面化を反復する。この行為によって「良い対照」はエスに破壊されることから免れる。つまり、クライン的なメランコリーは、暴力の加速度的な増殖（これがクライン的な「死の欲動」である）によって駆動されながらも、それはみずからの根源的な暴力を抑止する「良い対象

＝超自我」への「愛」のために行使される。バトラーはここにクラインにおける「サディズムの倫理」とでも呼ぶべき可能性を読む。これは「靖国」的なメランコリア／マゾヒズムの閉域（戦後の戦前性）から逸脱する可能性を秘めたメタ心理学的思弁である。少なくとも現代日本のある種の言説空間を「戦間期」的なものと認識するときに、ヨーロッパの戦間期が生産したフロイトとクラインの「死の欲動」を巡る思弁のアクチュアリティは疑い得ない――この指摘が本論文全体の示唆となる。